
とある二人の日常生活（ノーマルライフ）

カレーパン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノーマルライフ
とある二人の日常生活

【Nコード】

N9348T

【作者名】

カレーパン

【あらすじ】

二人の男女がいた。恋人になった。ただそれだけの二人。

（前書き）

この作品は、ついカッとなってやったものです。

結標さんのキャラが崩壊しています。

オリ主と結標は恋人同士です。

「なあなあ、あわきん」

「……、その呼び方は、やめて欲しいといつも言ってるでしょ……」

ある日の昼下がり。

とあるアパートの一室に、二人の人影が存在した。

一人はさらしにブレザーを羽織り、ミニスカートと言う露出度の高い服を着た、赤茶の髪を二つに括った少女。レベル4、結標^{むすじめ}淡^あ希^{わき}。

「まあまあ、そう言わずに……。これ、見てみ」
「ん？」

そしてもう一人。

格好は赤いTシャツに黒いパーカー紺色のジーンズで、後ろ髪^{へにはな}がツンツン立った真紅の髪の、中学三年の少年。レベル0、紅華^{べにばな}葉^は槻^{づき}。

二人が今何をしているかと言うと……。

「ほい」

「……、何、これ」

「何って……、あ、これ間違えた」

ただノンビリと話しているだけだ。

紅華は画像が映っている携帯を、結標に見せている。だが、その中身は間違えて映したもので、そこには可愛い少し紅華に似ている女の子の写真が映っていた。

それを直ぐに入れ替えて、また結標に見せる。

「こっち。こっちを見せたかったんだ」

もう一度結標に見せた携帯には、さつきとは違いある白髪の青年が映し出されていた。

一般通称『一方通行』^{アクセラレータ}。本名は誰も、本人すら知らないらしい。能力から名が付けられ、それが通称になってしまっている。

この学園都市230万人の頂点、レベル5第一位。つまり、最強である。

その最強の男は、紅華の携帯の写真の中では、茶髪の小さい少女と一緒に街中を歩いていた。

「それよりも、さつきの写真は何かしら？」

「え、ちょ、淡希さん？」

そんな写真に目もくれず、結標は紅華へと迫る。今の結標を、彼女を知っている人が見れば眼を疑うだろう。今の彼女の表情は、嫉妬を抑え込んだ少女のそれだからだ。

結標の豹変に思考が付いていかず、紅華は混乱する。どれ位混乱しているかと言うと、戦闘中も変わらない彼女への呼び方が、今の瞬間は変わりさん付けになっているくらい混乱している。

「ちょっと見せなさい」

「え、おいしい!？」

不意を突かれ、紅華の手から携帯が取られる。

別に力尽くで取られたわけではない。彼女はレベル4の大能力者、ハイブポイント『座標転移』なのだ。能力を使い、彼の手から携帯を取るのくらい楽勝だ。

「で、これは誰なのかしら？」

「へ？ あ、これ？」

「そうよ。これは、誰」

結標が突き出した紅華の携帯には、先程紅華が間違えて見せた写真が映っていた。

その写真を見て、一度結標に視線を移し、もう一度携帯を見て溜め息を吐いた。

「な、なによ……」

「あゝ、何を勘違いしたのか分からないけど、あわきんの考えは多分違うぞ？」

「え、へ？」

紅華が言う結標の考えとは、その写真の少女と紅華が言う関係なのでは？ というものだ。その予想は見事に命中しており、それを否定されて彼女は微妙に狼狽える。

「それは、俺の妹だ」

「妹……?」

「そ。第一、俺は年上にしか興味ないし」

「え、きゃっ!」

いきなり、紅華が携帯を突き出していた結標の腕を掴み、引つ張った。

当然、突然のことで結標は反応できずに、そのまま紅華の腕の中に入る。そして、紅華はその状態で抱きしめる。

「ちよつと、葉槻君……」

「まあまあ、落ち着きなつて……、淡希」

「っ——！」

いきなり真剣な声を耳元で聞き、名前を呼び捨てにされて、結標の身体が硬直する。

お互いの心音が聞こえる——

お互いの体温が感じられる——

お互いの想いを認識できる——

そんな距離で、そのまま数秒経つ。

不意に、結標が口を開く。

「葉槻……」

「なに？」

そこから出て来たのは、抱きしめてくる相手の名前。

受け入れる訳でもない。抱きしめ返す筈の両腕は、だらりと下げられたまま。

拒絶する訳でもない。拒絶するのなら抵抗するだろうし、能力を使うことも出来る。

しかし、結標は何もしない状態で、言葉を紡ぐ。

「葉槻は、本当に、私で良かったの？」

「……、」

恋人。

この二人の関係は、その二文字に収まる。

「良かったの？ って、何だそりゃ」

少しの沈黙の後、紅華は軽い口調でそう告げた。

「——良かったに決まってる」

「っ……！」

迷いのない彼の言葉に、結標は息を呑む。

どこまでもストレートに、どこまでも真っ直ぐに、その言葉が彼女の心にストンと落ちる。

「良くない筈がない。悪い筈がない。だって俺は、こんなに結標淡希が好きなんだ」

抱きしめる力を、少し強める。

自分の心が、しっかりと伝わる様に……。

「お前が、化け物（能力者）って呼ばれていようと何だろうと、俺はお前が好きなんだ」

結標に何も言わせないように、矢継ぎ早に言葉を述べていく。

「別に、お前が結標淡希だからじゃない。結標淡希がお前だったか

ら好きになっただ。お前自身が、好きなんだ。能力とか肩書きなんて、お前を象る一つの要素でしかないんだよ」

だから……。

「——お前が、好きなんだよ」

「貴方は……、どうしてそんなに——」

——強いのか？

そう続く筈だった口が、塞がれる。

同じ口で、距離が零になった。

「ん……、は……」

「……、」

ただ触れるだけのキスは、ほんの数秒で離れる。

しかし、体感時間はお互い感じていた数分ほどなど経っていなかった。

「いきなりは酷いんじゃないかしら？」

「そうか？ いつも通りだ」

そう言って、また唇を重ねる。

今度は、結標の腕はしっかりと紅華の背に回されている。

二人のそんな甘々空間は、来ることになっていた土御門元春が来

るまで続いた。

ついでに、その事を数日ほど弄られた。

（後書き）

自分的には、甘く出来たと思います。

それよりも、何故か普通に甘いものを書く筈だったのに、いつの間にか途中からシリ阿斯（笑）に突入していました。

何故？

その答えを知っているのは、きっと神様だけです（え

では、こんな短編読んでくれた方々に、最上の感謝を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9348t/>

とある二人の日常生活（ノーマルライフ）

2011年10月7日14時51分発行